

鳥取子ども学園 学園だより



第36号
2014年12月1日

○発行
鳥取市立川町5丁目417番地
鳥取子ども学園後援会
電話 (0857) 22-4206
http://www.tottorikodomogakuen.or.jp/
○振込口座
郵便振替 01490-9-9106
題字 尾崎悌之助



ドムシエロ孤児院2階のコレチャック記念館にて

「世代」「地下水道」「灰とダイヤモンド」等
ポーランドの反ナチ抵抗運動を描いたアン
ジエイワイタ監督が「子どもの権利条約」採
択実現に向
けて、十八
年の歳月を
かけて製作
したと言わ
れる映画
「コレチャ
ック先生」を
観て以来、
ポーランド
に行きたい
と願ってい
た想いがや
つと今年実
現した。

子どもの権利条約草案は一九七八年、ヤヌ
シユコルチャックの実践を基にしてポーラ
ンから提案された。
子どもの権利条約は、一九八九年に国連で
採択され、一九九四年に日本は批准した。
今年それぞれ二十五周年、二十周年の節
目の年に当たり、鳥取養育研究所の「子ども
と施設の権利擁護全国ワークショップ特別企
画」として「ヤヌシユコルチャックの足跡を
訪ねるポーランドツアー」が企画され、鳥取
子ども学園の幹部職員六人を含む総勢十九人
のメンバーで、九月二十六日～十月二日の日
程でポーランドへ行ってきた。
コレチャックと孤児院職員は、命がけで
二百人の孤児たちの人間の尊厳を守り抜き、
孤児たちと共に、トレブリンカ絶滅収容所に
消えていった。
ナチスドイツは一九四〇年にポーランド
を占領し、一九四二年、ユダヤ人絶滅を目的
として、一日五千人を殺戮するトレブリンカ
絶滅収容所「殺人工場」を作り、ワルシャワ
ゲットーから貨車でユダヤ人を次々送り込
み、三十万人を虐殺した。
コレチャックは、孤児たちと共にゲットー
に閉じ込められ、二百人の孤児たちを食べさ

子どもの人権を柱に据えた子育て文化の創造を

子どもの権利条約国連採択25周年・日本国批准20周年を迎えて

「主の力が働いて、イエスは病気をいやしておられた。すると男たちが中風を患ってい
る人を床に乗せて運んで来て、家の中に入れてイエスの前に置こうとした。しかし、群
衆に阻まれて、運びこむ方法が見つからなかつたので、屋根に上って瓦を割かし、人々
の真中のイエスの前に、病人を床ごとつり降ろした。イエスはその人たちの信仰を見て、
『人よ、あなたの罪はゆるさされた』と言われた。』（ルカ5:17、20）

鳥取子ども学園 常務理事・園長 藤野 興一

せ、子どもたち自身による裁判所、子ども議
会、子どもが決めた法律を作り、子どもは大
人と同じ尊厳を持った人間であり、大人の所
有物ではないことを実践した。そして孤児た
ちと共に尊厳死を選び、トレブリンカ絶滅収
容所に消えていった。「子どもの権利条約」
はその実践から生まれた。
私たちは、コレチャック研究所とドムシエ
ロ孤児院を訪問し、コレチャックと孤児たち
が緑の旗を先頭に行進した同じ道をたどり、
トレブリンカ絶滅収容所跡を視察し、ポーラ
ンド子どもの権利擁護庁長官（国会で選ばれ
た大臣）と交流し、ワルシャワ蜂起博物館に
学んだ。

コレチャックと孤児たちのその時の行進
は、尊厳に満ちており、ナチスの兵士も手が
出せなかつたと伝えられる。

今、日本の子どもたちは施設の子ともたち
も、巷に放置された子どもたちも共に、受難
の時代を生きている。

平成二十五年児童虐待七三、七六五件
（速報値）。三日に一人の虐待死事件。施設
内虐待報道も絶えない。不登校も小中学生
十二万人、高校生五・七万人。ニート、引
きこもり推定七十万。『非行』や『いじめ
（十九・八万件）』。落ち着きのなさ等の発達
障害的症状を示す子どもたちの増加。等々。

今こそ、日本の施設や地域・家庭に於いて、
子どもの人権を柱に据えた子育て文化の創造
が求められている。

社会福祉法人鳥取子ども学園は、そのパイ
オニアとして、民間キリスト教社会事業の先
駆性・献身性を高く掲げて今後とも歩みたい
と思う。ご支援賜りたい。

法人本部

ご支援に感謝して

理事長 尾崎 倭子

神のご恩寵と皆様への祈りに支えられ、恵みのもとに学園の歩みが続けられていきます事に心より感謝致します。

今年度は鳥取こども学園にとりまして、希望館生活棟の改築資金を、募金として皆様にお願ひするに、大きな課題を持った一年となりました。

募金趣意書でも述べていますが、鳥取こども学園希望館は子ども心の成長と心の健康を援助するための施設として、

平成六（一九九四）年に開設された情短施設です。開設から数年後に教育治療棟は建てられましたが、子ども達の日々の生活は児童養護施設で使い続けてきたホーム棟でした。築四十数年となった現在では地盤沈下による傾きが激しく、安心と安全に不安が感じられ、改築が急がれるようになりました。子ども達によりよい生活の場を、と関係各位に説明すると共に皆様に募金をお願いすることに、よって、建築が実現の運びとなりました。

鳥取こども学園の一〇〇年余の歴史は、地域の方々と学園に心を寄せて下さる全国の皆様の、善意の歴史でもありました。明治、大正、昭和、平成と時代は

激変し社会も変貌しました。それぞれの時代に学園を襲った幾多の苦難に、常に手を差し延べ支援を続けて下さったのが、地域のそして全国の皆様でした。私たちは、心を寄せて下さる方々の善意に支えられ、学園の今がある事を、深く感じていきます。

今社会は、人と人の繋がりが希薄になり他の人を想う心の乏しい世の中だ、と言われています。このような時代に、皆様から変わらぬ温かなご支援を頂いております事は、鳥取こども学園の何よりの支えでありただただ感謝でございます。私たちは皆様の温かなお気持ちを心に刻み、新しいホームを待ち望んできた子ども達と共に、更に充実した施設となるよう努めます。今後も見守って頂きますようお願い致します。

児童養護施設

鳥取こども学園

鳥取こども学園の第二児童棟裏に、昭和十年に石碑が建立されています。鳥取こども学園が現在地に全面移転したのは昭和十九年ですから、それ以前の石碑です。石碑に刻まれた文字を読むと、『昭和十年八月に吉成町の五年生女児が馬ノ瀬の淵で水泳ぎをしていて命を落としたこと。その時、鳥取を訪れていた四国六十一番子安本部長山岡僧正様が、この事を聞いて憐れに感じ、子安婦人会が發起人となり、魔ノ淵と言いつたえられていた馬の背の淵に吞まれた子どもたちの成仏を祈願して、地主様の篤志と厚い信仰のある方の力によって建立された。また、

正月OB・OG会 & 第一児童棟お別れ会のお知らせ

新しい第一児童棟（希望館生活棟）の建築が進められ、まもなく完成を迎えようとしています。年末にも子どもたちの引っ越しを終えて、年明けには現第一児童棟を解体することになっています。新年のOB・OG会の機会に第一児童棟お別れ会を下記のように企画しました。参加いただけるOB・OG（かつての職員も含む）の方は、電話、ファックス、メール、郵便他の方法で職員に出席をお知らせください。お誘い合わせの上、お気軽にお越しください。

★日時 2015年1月2日（金）
午前11時半～午後4時頃迄

★会場 鳥取こども学園
希望館教育棟大研修室

★内容 昼食パーティー（11時半）
第一児童棟見学と落書きなど（12時半）

思い出のホーム（こばと、わかば、しらゆり、のぎく、旧さくら）にメッセージをお残しください。

★会費 1,000円

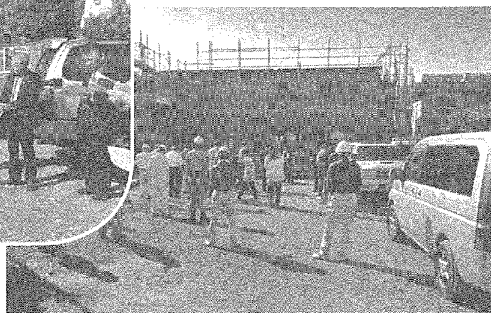
★申し込み締め切り

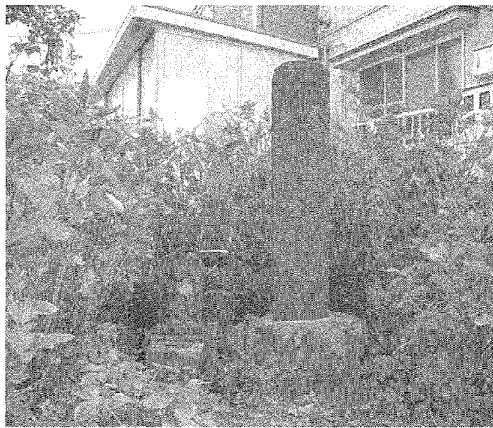
2014年12月18日（木）

※例年と時間と場所が異なっておりますので、ご注意ください。



新第一児童棟 上棟式





毎年八月にお祭りをするとあります。しかしながら、鳥取子ども学園に残っている記録では、「ここでお祭りをしたという記載はありません。もっとも戦争、鳥取大震災の最中、そんな余裕は無かったですよ。」

今年の八月二十一日、半世紀以上ぶりに、ふじ、ひまわり、あかりホームの児童と職員で地藏盆として、石碑の横手で流しそうめんをしました。児童と職員で竹を加工したり、様々な天ぷらを作ったりと子どもたちも楽しみながら準備をし、お地藏様にもお供えをしました。また、園長と共に尾崎理事・評議員にも参加して頂き、子どもたちの健やかな成長を願いながら、楽しいひとときを皆で過ごしました。

さくらホームのホーム行事

ホーム長 大前 靖孝

「今年はホーム行事、泊まりがいいな」と子ども達と話をしていて、そんな意見もありさくらホームは十月に船岡竹林公園に宿泊へ行ってきました。

天気予報は雨、心配しながら一日目スタートです。まずはみんなでマーケットに夕食の材料を買いに行きました。「パーベキュウの材料を探してきてね」と「はーい」と子ども達がかごに入れたのは大量のおやつ、「おい！おい！」といいながら子ども達の楽しみな様子が伝わってきました。夕方、食材を持って船岡竹林公園へ到着。着くと子ども達は大喜び、誰が一番にパンガローに着くか競争です。「荷物と食材忘れないですよ」と言った頃には子ども達は遙か遠くに……。パンガローに到着するとみんなに係決め、野菜係、おにぎり係、ケーキ係に分かれて夕食づくりのスタートです。ここでみんなの手際の良さにビックリ！全部が素早く出来てあつという間に完成しました。年少のKくんの「みんなそろっていただきます」の声で夕食です。パーベキュウのお肉、野菜、おにぎりどれも最高に美味しかったです。そ

の後は、Mちゃんの誕生日会をしました。Mちゃんも「いつもとは違う誕生日会でとっても楽しい！」と。ケーキを食べてお腹いっぱいになり、みんなで温泉に行きました。船岡美人温泉で、みんなが美人になってパンガローに戻り布団へ。「今日は夜更かしする！」といながら、子ども達は二十三時には夢の中へ。

心配した天候もなんとか大丈夫でした！二日目は雨、朝食を食べ、梨狩りへ出発です。「いっぱい食べるぞー！」と気合い十分、がこれが予想以上に食べれない子ども達は二個が限界。三十分でキフアップでした。その後は、昼食を食べ、パスタのお店に、食べれるかなと心配しましたが、これは別腹、パスタ、デザートを完食。毎過ぎ、学園に戻り片付けをして楽しいホーム行事はおしまいです。その後、子ども達は「いつてきまーす」と外や体育館へ行き、いつもの光景に戻りました。私自身も沢山の思い出が



出来て、子ども達の成長に驚き、有意義なホーム行事になりました。

乳児院

鳥取子ども学園乳児部

看護師 西尾 裕子

私は、平成二十二年十月より田中院長の縁で乳児部へ勤務させて頂いております。勤務初日どんぐりホームの子ども達のきらきらした丸い瞳が、今でも印象深く残っています。私の勤務した当初は、看護師一名を含むホーム職員五名体制で、ホーム職員は、勤務時間外での仕事も多く多忙でありました。私は、若い頃看護師として勤務しておりましたが、出産を機に退職しました。福祉施設勤務経験は全く無く二十年ぶりの勤務ではありましたが、少しでも職員さんの力になればとの思いで、今日まで勤務させて頂いております。生活苦や親の虐待、精神疾患等の様々な家庭事情で預けられている子ども達、耳を疑うような事も多々あり、驚きの連続でしたが、その様な子ども達だからこそ「家庭的な子育て支援」の必要性を強く感じます。十ヶ月間母親のお腹の中で育ち、出産後は、お乳を飲ませてもらう、オシメを交換してもらいと、

様々な人たちの手を借りて育つ子ども達
が、成人に達した時、人として忘れて欲
しくない事があります。「孝養」という
ことです。「孝と申すは、高なり、天高
くといえども孝よりは、高からず。孝と
申すは、厚なり、地厚けれども孝よりは
厚からず。」という言葉があります。自
分を慈しんでくれた人への恩を、忘れな
いで欲しいと思います。どんなに立派に
出世し、年を重ねても育ててくれた人へ
の感謝の気持ちがない人は、一人前とは
言えません。近年人の心の荒廃を強く感
じます。本年八月長崎県佐世保で、高一
女子生徒が、同級生の首を切り落とす
という事件がありました。殺害した女子高
校生は、「人を殺してみたかった。」と言っ
ています。この女子高校生の父親は、ヤ
リ手の大物弁護士で地元のテレビにも出
ていた名士、佐世保では、トップクラス
の高額所得者であり、母親は、東大卒で
教育熱心のエリート一家でした。近年母
親が亡くなり、喪中にもかかわらず父親
は、婚活で二十歳も年下の女性を迎えて
いたと言います。世間で幸せそうに見え
るお金や地位は、幸福とは全く関係ない、
福運が尽きればあっという間に、崩れて
しまつ事を痛感します。また三年半前の
三月十一日東日本大震災をきっかけに、
近年各地で地震、豪雨などの被害が起き

ていますが、東日本大震災の犠牲者総数
は、震災関連死を含めて約三万二千人に
達し、被災地の復興は極めて遅れており、
岩手、宮城、福島を三県を中心に未だに
二十七万人が不自由な避難生活を送って
います。南海トラフ地震や首都圏巨大地
震が来れば、日本は潰滅状態となり、現
在の日常生活など全く不能となっていま
います。学園においても火災や地震の訓
練を定期的に実施していますが、子ども
達の安全を考えると、いつ起こるか予測
不能な災害の事も真剣に考えていかなけ
ればいけないと思います。微力ではあり
ますが、これからも乳児部の子ども達も、
健康で、豊かな心を持ち安全に生活がで
きる様に関わらせて頂ければと思ってい
ます。

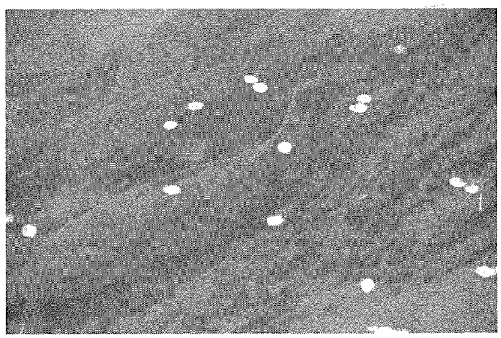
情短施設
鳥取子ども学園希望館

コメンタリー 野田 諭

通所部門には、修立小学校分教室と、
東中学校のぞみ分校があります。また、
家から出ることが精一杯で、学校(教
育)場面に日々参加する活動エネルギー
を蓄えていくことが必要な子どものため
に、「てくてく」というグループ活動を

する場所があります。今回は、「てくて
く」について、紹介いたします。
「てくてく」の活動は、まずは家から出
て活動することが楽しいという感覚を
養い、家以外での居場所を作っていくこ
とを第一の目的に、子ども一人一人が興
味・関心を持つてくることを一緒に探し、共
有していきます。「てくてく」という場
所が子ども一人一人の居場所になり、職
員との関係ができると、次はその子ども
の抱える課題に一緒に取り組んでいくこ
とや、自分の得意なこと、自信を持てる
ことを一緒に探していきます。そうして
いく中で、子ども一人一人の「こんなこ
とやってみたい!」という主体性や、自
分にはこんなことができる!という自
尊心を育んでいきます。それらが、日常

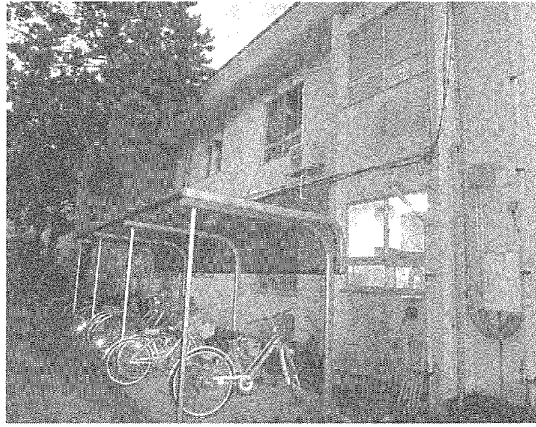
生活を充実して過ごす活動エネルギーに
なっていくのだと考えています。
季節に応じてイベントなどもしてお
り、春は飯ごうでお米を炊き、カレーを
作りました。火おこしも自分達で取り組
み、自信になったようです。夏は海水浴
やバーベキューを楽しみました。今後
は、てくてく文化祭や、スキーなども計
画しており、色々な経験をしながら成
長するきっかけを作れたらと思っていま
す。
そんな中、最近恒例のプログラムとし
て、『てくてく写真コンテスト』を季節
ごとに行っています。高性能の一眼レフ
カメラを使い(寄付でいただきました)、
季節ごとのお題に応じた写真を皆で撮り
にいきます。その中から子ども自身が出
品する写真を選び、それを子どもや大人
が審査し、各賞が決まっています。単
純に優秀であるというだけではなく、
「発想がステキで賞」「おもしろい賞」
などの他、副館長の独断と偏見で決まる
賞などがあり、発表当日は子ども達も下
キドキしながら待っています。教育棟の
一階に他の作品と共に展示してあるの
で、足を運んで見てもうえたら、子ども
達も喜ぶと思います。よろしくお願ひし
ます。



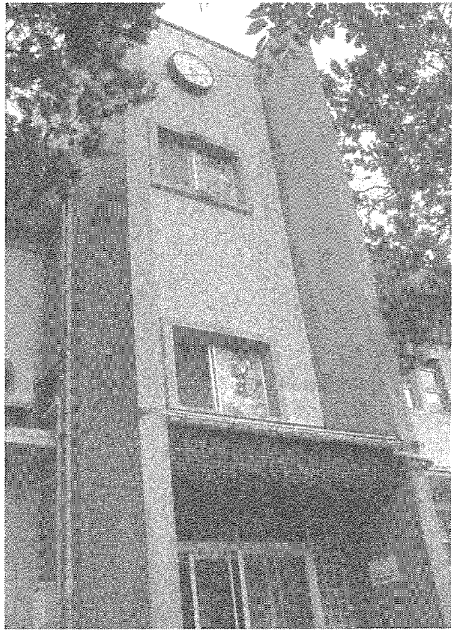
第3回写真コンテスト特別賞受賞作品

ありがとう…… 第一児童棟（新館）

副館長 藤野 謙一



希望館児童棟改築に伴い、二〇一五年一月には、第一児童棟（一九七三年竣工、当時は「新館」と呼んでいた）が解体されます。この建物は、一九六一年の二階建て児童ホーム（家庭舎）、一九六二年二階建て女児児童ホーム（しらゆり）に続き、従来の大舎制から少しでも家庭的雰囲気をと、小舎制を目指して建築されたものです。さらに、夏涼しく、冬温かいという謳い文句で、サーモコン式



耐火鉄筋造りといった当時としては最新の構造であると聞いており、「子ども達のために」という「思い」の詰まった建物です。当初は、年少児（幼児等）棟でしたが、修繕を経て一九九四年には、鳥取こども学園希望館の生活棟として生まれ変わり、現在に至ります。この建物の約四十一年間という歴史の中で、希望館（わかば、こはと、のぎく、しらゆり）としては半分の二十年間、常に子ども達の生活そのものとして在り続けてきました。

この文章を書いているとき、ことを巢立っていた子どもや職員一人一人の顔、様々な出来事の一つ一つが浮かんできました。思いがあまりすぎて「一言では表現できない」のが正直なところです。表現するのに、「大きな木」（シル・シルヴァスタイン作）という私の好きな絵本に助けてもらおうと思います。内容は次の通りです。

腰をかけた。木は最初から最後まで幸せであった。『この第一児童棟は、一人一人の人生そのものを包み込み、受けとめ、見守ってききました。ありがとう……第一児童棟。そして、お疲れ様でした。』

保育所 鳥取みどり園

保育士生活十四年目を迎えて

保育士 森本 千恵

今年の夏は例年にない程、天候に恵まれなかった年でした。ここまで太陽を見なかった夏も珍しいものです。憧れだった保育士の仕事につき、あつという間の十三年でした。悩み苦しむ度に仲間を支えられ、先輩方に励まされ、何とか乗り越えてくることが出来ました。そして今までこうして仕事が出来たことの大きな理由はいはり、子どもたちの笑顔があつたからだと思います。どんなに辛くてもそこに笑顔があつたから頑張ることが出来ました。○歳児クラスの担当を二年続けてきていた中で、一人一人の生活を保障し、健やかな育ちを保護者の方々と共に見守っていき、「みどり園に預けて本当に良かった」と思っていただけのような保育をめざすことの大切さを改めて実感しています。自分自身も一人の親として、毎日奮闘しています。働きながら子育てを頑張るこ



わらべうたあそび

わくわく子育て支援センターは月曜日
から金曜日、朝九時三十分から夕方四時

いっしょに遊びませんか？

保育士 古川 典子

●わくわく子育て支援センター

この大変さ……。休まることのない日常
……。親になり、また保護者になり、保
育園という存在の大切さを痛感していま
す。
子どもたちの健やかな成長を第一に考
えながら、保護者の方と同じ目線に立
ち、共に子育てをしていく良きパート
ナーになれるように努めていきたいと
思っています。



運動会

まで未就園の子どもとその保護者や祖父
母の方が一緒に利用する施設です。

毎月の行事は、親子教室と育児講座、
おはなし会として公民館を中心に地域で
活動されている「かみふうせん」による
絵本の読み聞かせ、毎週金曜日は地域の
方によるわらべうたをしています。

施設内には様々な発達に合わせた玩具
があります。

赤ちゃんの頃や初めて施設を利用され
る頃は、大人の方が玩具や遊びを選び、
一緒に遊んでいます。子どもが大きくな
ったり、施設に慣れたりしてくると子
どもの方が玩具や遊びを選んで一緒に遊
んでいます。そうしているうちに大人同

● 鳥取みどり園年間行事 ●

入園式／遠足／バザー／七夕祭り／プール開き／卒園生の集い
／運動会／感謝祭／クリスマス祝会／講演会／作品展／ひなまつり
／お別れ会／卒園式／保育参観／交通安全教室／納涼祭
／施設訪問／地域地区老人会との交流／内科健診／歯科検診／6
歳臼歯健康講座／尿・便・蟻虫検査

● 毎月行う行事 ●

お楽しみ会／誕生会／避難訓練／発育測定／交通安全指導／ク
リナー／おはなしの会（2～5歳児）

士も「何ヶ月ですか？」など会話がしま
り、子どもを中心とした大人の輪がで
てきます

大人同士（特に母親が多いですが）つ
ながると日々、ちょっとした悩みや疑問
を気軽に話し合い、ホッと安心したり、
試してみようかな？と思ったりできるよ
うです。

子どもにも大人にもほっと安心でき、
笑顔になってもらえる施設でありたいと
思います。

診療所

二児の発達クリニック

子どもを信じられる大人に
身近なコルチャック先生たち

院長 川口 孝一

巻頭に藤野園長が記したポーランドツ
アーに私も参加させて頂きました。コル
チャック先生は真に子どもを信じられる
人だったのだと思います。「真に信じてい
る」とは、その結果をも含めて請け負う覚悟
を持つて信じるという言葉だと思います。
後で結果を見て、「信じていたのに裏切
られた」と思う様では、「真に信じてい
た」とは言えないと思います。日本のコ
ルチャック（誉めすぎ？）藤野園長もま
た真に子どもを信じる事が出来る方
です。前回の学園だよりでは、変わらない
園長について書きましたが、ポーランド
では至るところで『ワルシャワ労働歌』
を唄い、血気盛んな若き青年の顔になっ
ていました。
話が少し変わりますが、前回の学園だ
よりが出た後、懐かしい方から（園長に
ついて記した私の文章への感想を含む激
励の）お手紙を頂きました。平成元年か

らしばらく学園の校区である東中学校におられた手皮小四郎先生からです。お礼のお返事をと思いつつ、筆無精なもので今に至ってしまいました。この紙面を借りてお礼をさせて頂きます。ありがとございました。手皮先生の事は知っておられる方も多いと思いますが、先生もやはり真に子どもを信じられる教師でした。他の学校に異動されてからの話になりますが、私が希望館外来相談で関わっていた少しやんちゃな中学生の事でお世話になりました。その子が修学旅行に連れて行ってもらえないかも知れないという情報をお母さんから聞きしたので、中学校にお願い（フレーム？）に単身乗り込んで行った時の事です。数人の先生の中に手皮先生もいらっちゃって、他の先生方が不安そうに頭を抱えておられる中、気負いなく当たり前の様に、「何かあれば私が連れて帰るので連れて行きましょう」と軽くおっしゃって下さいました。正に鶴の一声、その子は修学旅行に連れて行ってもらえる事となり、トラブルも無く全日程を終え良き思い出を作った帰ることが出来ました。本当にありがとうございました。

発的なブラックな突っ込み発言（勿論、たぶん？ 本人はジョークのつもり）が多く、誤解される事も多いのですが（気の長い？ 私もよく挑発に乗ってしまい、マジ切れで反論してしまふ事がありません）、希望館館長就任前の県職員であった時代から児童福祉施設における子ども自治活動の保障と管理主義からの脱却を目指し、現場で取り組んで来られました。今その志は、このツアーにも参加した館長の愛弟子、学園職員で鳥取養育研究所の副運営委員長の米田怜美氏に引き継がれています。

身近な日本のコルチャック先生を紹介させて頂きましたが、ここで実名で登場して頂いた方々には前もっての承諾は何も得ておりませんが、お許し頂けると信じております（西井館長から突っ込みがあるかも）。私はまだまだこの道に没頭仕切れず、中途半端な事しか出来ていませんが、この方々に少しでも近付けるよう、身の丈をわきまえつつ、精進してみたいと思います。



児童家庭支援センター「希望館」
子ども家庭支援センター「希望館」

●さつき話をした人の表情、思い出せませんか？子どもの表情、友達表情、親の表情。目は口ほどにものをいふ、という言葉もあるくらい目はいろいろな思いを伝えます。しかし、表情と言われしてみると意外と内容は覚えていても表情を思い出せないことがあります。私たちは言葉というコミュニケーションツールを持っていきます。それはとてもわかりやすく、便利です。ですが、本心は言葉での表現ではなく、表情（目）が一番素直な思いを表現しているかもしれません。学校から帰ったときの子どもの表情、仕事から帰ったときの家族の表情、そこには言葉では表現できないいろいろな思いが隠れているかもしれません。相手を心配させたくない言葉での「楽しかった」と、それでもしんどかった表情から出る「悲しかった」はどちらを受けとめてあげられたらいいでしょうか。

●誰でもその立場になり得るといふ言葉を耳にしたことはありませんか。殊に児童虐待に関して、私はこの言葉があまり好きではありません。生きる権利を奪われる日々だったり、生来的なハンディを抱

えているにもかかわらず、当然あるはずの人間的な支えがそこに無い、そういった境遇がなぜこの社会に生じるのか。誰でもその立場になり得る社会というなら、たしかにとなりますが、他人事では無いよという言葉はどこか他人事の響きを感じるのです。この便りを開いていらっしゃるような関心がある方のごことばならまた違つたでしょう。

児童家庭支援センターは子ども・家庭に関するあらゆる相談に応じる身近な機関という看板を掲げています。そこには、あなたと一緒に、という思いがあります。

先日はアウトドアを楽しむ多くの方々にマシガンのように岩石が降り注ぎ生命が奪われました。私の出身地の近所では甚大な土砂災害がありました。不確かな世の中です。だからこそ、ここに電話をすればホッとすると、ここに行けば自分を発揮できる場所があると感じてもらえる確かな場所でありたいと思っています。皆が、自尊心を持ち、つながりを感じ、能動的にこの社会で生きていける。そのための一端となれますように。

●子ども家庭支援センター「希望館」に来て、一年半が過ぎました。支援センターにいと、みなさんが、よりよく住める社会とは何だろうかとよく考えま

す。今の社会は、集団で過ごし、協調性をもって動くことを求められます。また、働いてお金をもらい、生活するという仕組みになっています。それは、とても大事なことであり、当然のことな方もありません。しかし、それだけを求める社会では、生きづらさを感じている人たちもいると支援センターに来てよく感じます。集団の中に入れない、働きたくても今の社会では働きづらさを感じている方がいます。そのような現実がある中で、どのようにしていけば、よりよく住める社会になっていくのか、まだ答えがわかりません。そもそもそのような社会にすること自体、難しいことなのかもしれません。だからこそ、そのような方に寄り添える場所が少しでも増えるといいいのではないかと、支援センターに来られる方に、何ができるのかを考えながら、日々、そのように感じています。

◆来所相談

平日 9時～18時

(祝・祭日を除く)

◆電話相談

月～金 9時～24時

TEL/0857-27-4153

※緊急の場合は土日、祝日24時間対応

里親支援とつと

『子どもと家族の絆 フォーラム』を終えて

里親委託等推進員 吉田 信彦

去る九月十三日、米子市文化ホールにおいて開催しました「子どもと家族の絆フォーラム」は、四百人を超える多数の御参加をいただき、盛会のうちに無事終了しました。

かねてより里親制度の普及啓発に取り組んでいますが、いろいろな会合、研修会等で里親の制度や現状等を説明すると「いままで、触れてはいけな話題、もっと暗いものだと思ってた」といった感想が多く聞かれ、一般の方には制度が十分に知られていないことを感じます。このことを踏まえ、この度のフォーラムは、一般の方に、まずは里親を知っていただき、興味をもってもらうことを目的としました。

島田洋七氏による「がばいばあちゃんに学んだ家族の絆」と題した講演、関西芸術座による里親子を題材にした演劇公演「おかえり！」に加え、雅楽演奏、ポツ

ブコン・綿菓子・バルーンアート・射的・おもちゃの病院などのお楽しみコーナー、企業・団体・個人の皆様からの協賛品によるお楽しみ抽選会、託児サービなど、子ども連れの方が多く参加いただけるような楽しい内容を盛りだくさんに企画しました。

来場された方のアンケート回答では「里親のことを知らずにいたことを反省するとともに、視野が広がった」「講演は、笑いの絶えない話のスピード感に脱帽し、随所に教訓が織り込まれ心が温かくなった」「子どもは社会の宝。信頼と克己心を持って共生する日々でありたい」「講演の、笑える子どもがいなくなったら悲しいでしょう、という言葉に泣きそうになった」「里親は認知度が低い。家族の絆と地域の絆の輪を広げるため、今の時代にとっても大切なフォーラム」「託児や子供連れで楽しめるコーナーが有り参加しやすかった」「昔の子育てには、地域社会のつながりがあった。懐かしむだけでなく今を考えなくてはいけない」等、様々な反響をいただきました。啓発事業として大成功だったと感じています。

また、運営スタッフからは、里親、施設職員、行政職員と、児童福祉関係以外のボランティアの方等を加えた総勢九十

人に及ぶ人員が一つのイベントを協同して運営したことで、普段の立場を越えた一体感や達成感が得られたという声が多く聞かれました。

来場者、運営スタッフの双方とも、フォーラムのテーマ通り、「絆」を感じ取られたようです。今回の取り組みが、児童と児童をばくみ見守る全ての方の絆をつむぎ深める契機となるよう、今後継続して普及啓発に取り組んでいきたいと思っています。



自立援助ホーム

鳥取フレンド

自立することを考える

寮長 内藤 直人

だんだんと朝が寒い日が増えてきて、ホームの寮生たちにとっては朝起きるのがと体が大きなハードルとなる時期になってきました。

自立援助ホームでは年数を重ねるにつれてフレンドを出ることを考えなくてはいけなくなりそうです。ただ、自立をするとなるといろいろな課題が見えてきます。仕事に行くためには朝起きなくてはなりません。ただ、ほとんどの寮生がホームにやってきた当初は起きることができず、遅刻をしてクビになることは少なくありません。また、食事についても職員が作ったものであれば、簡単に文句を言うこともできますが、自分で作るとなると買い物、食事作り、食費のやりくり……といったことが必要になります。ただ、なかなかそこをきちんと理解して、行動できる寮生はほとんどいないのが現状です。前述のことは自立をきめる上では

我々のもとにやってくる寮生たちはその当たり前のことが当たり前に保障されていない家庭環境で育ってきた場合がほとんどであり、また個々の能力的な問題も重なるので、当たり前のことを当たり前のことにすることがとても難しい場合があります。

そんな中で支援をする職員は個々の『特殊性』を理解しつつ、ただ当たり前のことを当たり前にする『普通』を意識しながら支援をしなくてはなりません。先に述べた朝起きれない……ということに対して「起こす」「起こさない」という支援を選択しなければなりません。当然、遅刻が続けばクビになってしまう……という状況はあるのですが、それは世間一般では『普通』のこととそれを意識しないと、就労をすることができません。ただ、何らかの障がいがあり働く力はあるとしてもそもそも起きられない……といった『特別な』ケースもあり、その場合起こされないでクビになるというのは寮生にとってもつらいことだと思います。支援をする上でその寮生のことをよく知り、その寮生にあった支援をする……というのは当たり前ののですが、特に自立援助ホームでは社会との接点が多い分『特殊性』と『普通』との間に大きな矛盾・摩擦が起こりそこでバランスを

とった支援を行わなくてはならないという難しさがあり、日々そのことを意識しなくてはならないと考えているところと

最後に余談ではありますが、言葉にするということが課題の寮生がホームには少なくありません。先日、とあることで寮生に注意をする場面がありました。怒られた寮生もなかなか言葉にすることができず、注意をされるという場面では当然素直に謝ることができませんでした。ただ、次の日に食堂に「昨日はごめん」と書かれた小さなメモが置かれていてビックリしました。正面切った謝罪はできなくてもメモでも言葉にできるよじになったことを職員間で喜び、こういったことの積み重ねが自立するうえで必要なのだと考えさせられる一場面でした。

鳥取スマイル

寮長 田村 崇

自立援助ホーム部門の体制・機能強化のために倉吉市関金町から鳥取市に引っ越してきて半年が過ぎました。四月初めは何かとバタバタしておりなかなか生活

感を実感できなかったのですが、最近やっとこの鳥取市での生活に慣れてきたなめと感じています。町内会にも所属して、清掃活動、避難訓練、運動会など積極的に参加させて頂き、地域の中の一戸として、そろそろ馴染んできたのかなあと、勝手ながら感じております。現在鳥取スマイルは三人の男子寮生が在籍しています。我々スタッフ一同は、思春期真っ只中の寮生たちが、自分たちのことに向き合いながらもあたりまえの生活をちゃんと送っていけるようにということ

九月に岡山市で行われた西日本児童養護施設職員セミナーの分科会の一つに「年長児の移行支援」というのがあり、そこで自立援助ホームでの子どもたち(年長児)との関わりについて実践報告して欲しいとの依頼があり発願者として参加してきました。

この分科会のテーマは、思春期を「子ども」から「大人」へ移行する(うつりゆく)時期であるという視点や、「学生」から「社会人」へと移行するという視点の両面から考えるとこの時期というのはとても重要な時期であり、もっと積極的な支援をしていかなければいけないのではというもので、講師の先生は、この時期に完璧な自立(スキルなど)を求

めることに終始するのではなく、「大人」へ「社会人」へと移行しようとしている彼らの不利を少しでも軽減し、有利なスタートラインにたてるような支え、「大人」「社会人」への移行の準備をしっかりと支援していかなければいけない！そして私たちの関わりも重要ですが、社会自体もそのことに気付き変わっていかなければならないと熱弁されていました。

思春期、まさにこの時期、彼らの心の中は揺れ動き、自分自身でもコントロールできず、もがいていることでしょう。また、我々と出会う前に彼らは様々な苦い経験をしていたりします。そんな中でも彼らは、「大人」へと「社会人」へと成長していかなければなりません。我々スタッフ一同は、このような重要で大切な時期に彼らと出会い、生活を共にします。そして喜怒哀楽が生活の中に溢れます。その一つ一つが彼らの成長の糧となつて欲しいと思います。そしてその一つ一つから我々ももっともつと成長していきたくと思っています。

一人一人が笑顔絶やさず、たくましく生きていけるようこれからも一日一日を大切に寮生と暮らしていきたいと思えます。今後ともご支援頂きますようよろしくお願い致します。

地域若者サポートステーション事業
とっとり・よなご若者
サポートステーション

七年目を迎えて

総務コーディネーター 川端 江美

とっとり若者サポートステーションは、働きたい・社会参加したい思いを持ちつつも、自信がない・何から始めていいかわからないなど、就職や進路選択への悩みを抱えている若者（十五〜三十九歳）とその家族を対象とした相談支援機関として七年目を迎えました。

支援内容は、相談を中心としてグループワークとジョブトレーニングに加え、今年度から社会人基礎力習得支援（通称サポステ塾）を行っています。

サポステ塾では、就職活動に向かうにあたって、採用試験やビジネスマナーへの不安を抱える若者に目標に向けての計画を一緒に立て、練習を積み重ねていき、少しでも自信を持って就職活動に臨めるようサポートしています。

このような支援内容を自分のペースで利用してもらうことにより、自分らしい生き方を見つけていただくことを目指し

ています。

当所は平成二十年にオープンして以来、二十六年九月までに継続的に利用された方は約五百名、のべ相談件数は一万七千件を超え、のべ進路決定者数は約三百五十人と多くの方に利用をしていただいています。

利用を終えた方たちは、求職活動、就職、高校・大学などの進学、福祉サービスの利用などへと、自分らしい生き方を見つけて、それぞれの道に進まれます。私たちスタッフにとって、その大切な時期に立ち会わせてもらえることは喜びであり、今後も驕ることなく、一人ひとりの個性やペース・ニーズを第一に大切に考え、サポートをしていきます。

七年目の現在、多くの方と関わらせてもらう中で徐々に周知されてきていると感じていますが、当所の存在を必要としている若者や家族に届くよう、さらには「働きたいけど悩むなあ」と思ったらサポステと当たり前に来ていただけるよう日々、邁進していきます。

職員自己紹介



支援員 山根潤子

はじめまして。八月からとっとり若者サポートステーションで働かせていただいております。

利用者の方々、職場の上司・先輩、と関わらせていただく中で、毎日たくさんの新しい発見や気づかされる事が多く、日々勉強させてもらっています。

私もサポートステーションの一員として、相談者の方々に寄り添い歩んで行けたらと思っております。

とっとり若者サポートステーションが学園から離れていることもあり、多くの皆様とお目にかかる機会が少ないと思いますが、お会いできる事を楽しみにしています。どうぞよろしくお願い致します。

二年目、更なる充実を目指し

総務コーディネーター 山田 香子

よなご若者サポートステーションが開所二年目を迎えて、あつという間に半年が過ぎていきました。

今年は昨年よりも、もっとたくさんの人にお会いする機会も増えました。関係機関との連携も密になっているように思えます。

その中で先日、大山青年の家へ「日帰り体験学習」と題し、職員全員と利用者

の方で行ってきました。天気は、あいにくの雨でしたが、街中では見られない景色が広がっております。

まず指導員の方に、職業講話としてこれまでの体験談をお聴きました。最初の一年目は慣れなくて、仕事を覚えることに必死だったこと、そして、今では素晴らしい体験ができることなど語って下さいました。その内容は、利用者の方だけでなく、私たち職員にとっても大変貴重な話となりました。メインの活動である野外炊事では、みんなで協力してカレー作りを行いました。「おいしい」との声が全員から上がりました。指導員の方からもたくさんアドバイスをいただき、楽しく過ごせたと思います。

普段は事務所の中で相談支援活動を行っておりますが、こうして外に出たり、一緒に料理を作ったり、活動することで、利用者の方の知らない側面や新たな発見があるのだと感じました。サポートステーションで行っている進路や就職についての相談は、何も個室の中だけで完結するだけでなく、色々な側面からその方を知り、支援していくことの大切さを改めて実感したように思います。参加された利用者の方も、「今度はできなかったこと（力又一体験、沢登り等）に挑戦してみたい」と言われていたので、またこ

のような活動の機会を設けたいと考えております。

七月末より新しい仲間も加わりましたので、さらに活動の幅を広げて、利用されるみなさんの歩幅に合わせた支援を行っていききたいと思っております。

職員自己紹介

キャリアカウンセラー 柏木 悟

七月二十八日からよなご若者サポートステーションでお世話になっております。

コミュニケーションの難しさを日々感じながら過ごしておりますが、利用者の方々と共通の目標に向かって歩んでいけたらと考えております。チームサポートでの関わりの中から、私自身も視野を広げながら勤めたいと思っております。どうぞよろしく申し上げます。

鳥取養育研究所

副運営委員長 米田 怜美

今年二〇一四年は子どもの権利条約制定二十五周年、批准二十周年の年です。この記念の年に、鳥取養育研究所では、

「子どもと施設の権利擁護全国ワークショップ」の特別企画として、「子どもの権利条約批准二十周年記念ヤヌシュ・コルチャック先生の足跡を訪ねるポーランドツアー」を企画し、十九名の御参加をいただきました。

私たちは、「ワルシャワ蜂起博物館」、「コルチャック研究所」、「ドムシエロ（コルチャックが運営していた孤児院）」、「ポーランド子どもの権利擁護庁」、「トレプリンカ絶滅収容所」、「ユダヤ人墓地」とコルチャック像」等を訪問し、それぞれの場所で、人の尊厳について原点に戻り多くのことを感じ、学びました。

「存じのようにポーランドは大国から何度も侵略を受けた国です。自国の尊厳を護るため、国民が立ち上がり、いかなる時も伝統文化を含めた大切なものを護る強さを持ちながら、戦後ドイツからの謝罪を受け入れた、懐の深い国だと感じました。

現在、ポーランドには子どもの権利擁護を専門とする、憲法に定められた機関である子どもの権利擁護庁が作られています。日本と同じように、虐待やいじめを含む子どもたちを取り巻く課題を抱えながらも、子どもの権利を護るため、やらねばならないことは、できるかできないかではなく、するのだという意識で取

り組まれているように感じました。それはヤヌシュ・コルチャックから引き継いだ精神のように思います。

子どもの権利条約を柱に据えた事業を行っている鳥取養育研究所では、第四回を数える、子どもと施設の権利擁護全国ワークショップを、十二月三日（水）から五日（金）にかけて行います。また、来年一月には第九回の研究発表大会も企画されています。

各事業において、コルチャック先生と子どもたちが生きたポーランドで学び、感じたことを多くの方々と共有し、子どもの権利条約の普及と、子どもたち一人一人にとって、より良い今が保障されるよう、取り組んでいきます。

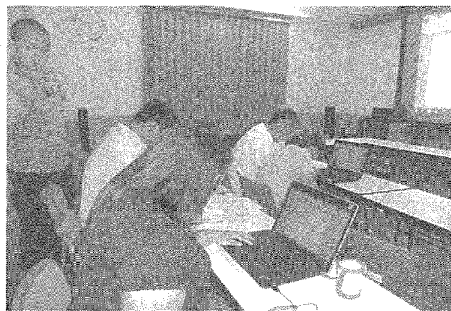


はまむら作業所

四月に事業開始した「就労移行支援事業」も半年が過ぎました。現在十名の利用者、六名のスタッフと共に日々活動しております。利用者さんそれぞれに目標や課題も異なり、また、支援体制や方法も千差万別。改めて、「個別支援の充実」の重要性を再認識しているところです。

日々の活動としまして、二年目となる農福連携事業への参加(年間を通して)、自主事業の白ねぎ、その他野菜の栽培等は継続中です。また、本年より企業様の御協力もあり、事業所として製品の組み立てや小物商品の製作指導をしていただいております。「日々努力」、「日々協力」、「日々謙虚な姿勢」をモットーに事業所全体で取り組んでいます。今後利用者さんの就労支援・訓練の一環として様々な商品製作等に携わりたいと考えておりますので、企業関係者様、どうぞご指導、ご協力よろしくお願い致します。

就労移行の支援としまして、日々の個別の関わりだけでなく、定期的かつ短期間の振り返りによる目標や現状の把握、関係機関の助言・指導、テーマを決めたグループワーク実施等、日々こつこつ活動



しています。(JST)の支援内容や考え方を本年より導入。関係者様の定期的なご指導を受けています。そればかりでなく、本年は地域の企業様や福祉事業所にお邪魔し、目標の確認や、職場体験等の学習による目標の再設定を始めました。「社会、企業で働き続ける事」「日常生活も自立させる事」その為には今、どういう事が準備として必要なのか、個々の利用者さんと考えているところです。定期的に実施する法人内関係者との就労支援連携連絡会議、法人内のカンファレンス等も合わせて活用し、法人チーム一丸となり就労支援の充実を今後も図ります。

まだまだ、大きな結果は出せておりませんが、はまむら作業所として、今後利用者さん、スタッフ共々一杯努めてまいりますので、どうぞ変わらぬご指導のほど、よろしくお願い申し上げます。

ひだまり

退所児童等アフターケア事業

「ひだまり」がアフターケア事業に取り組んで七年が経過しました。

七月には小沢見海水浴場で、飯ごう炊飯を楽しましました。五月から九月に草刈り機や鎌を使って田んぼの草刈りや里芋畑の草取りの就労体験を行い、初めて体験する者も、暑さにも負けず頑張りました。今年度六月より新たに鳥取県の委託事業として、就業支援事業を行っております。

退所(前)児童に対する生活支援・就業支援両面からの自立支援を一体的に行います。

多くの方に利用して頂き、一人でも多くの方が自分の希望する進路を見つけ、それに向かって進んでいき、希望がかなえられることを願っています。新しいスタッフを迎えております。



事務員
山根 玲子

「ひだまり」で縁があり、事務補助としてお世話になることになりました。皆さんのお役に立てるよう、頑張りたいと思います。

と思います。よろしく願います。



就労支援員
高階 金一

四月より、就労支援員として勤務しております。

定年退職後、就業の機会はないものと思っておりましたが、今回このような機会を与えて頂きましたことに深く感謝しております。

常に来所者の話が聴け、信頼される支援員でありたいと思っております。どうぞよろしくお願い致します。



就労支援員
大口 晃

五月より「ひだまり」で就労支援員として勤務しております。

中学の頃よりバレーボールをしており、児童球技大会にも同行させていただきました。このようなイベント、行事に積極的に参加していきたいと思っております。

初めての事ばかりで沢山の迷惑をおかけすると思いますが精一杯頑張りますのでよろしく願います。

当学園事業へのご寄付 後援会へのご加入に 感謝申し上げます。

前回報告以降、現在まで、ご寄付いただいた方々、
後援会に賛同（会費納入）していただいた方々は、
下記のとおりです。
心より感謝し、ご報告申し上げます。

寄 付 者 (2014.5.15～11.21)

敬省略

氏 名	氏 名	氏 名	氏 名
杉 森 忠 篤	原 田 澄 夫	大 源 真 美	古 川 潤 一
大 石 博 子	伊 達 季 代 子	(株) 岩 田 兼 商 店	谷 口 繁 子
松 原 千 恵 子	園はとほクリニック 代表取締役 太田 匡彦	ホリウチキヨコ	吉 田 禮 子
有限会社 ワールドワン	高 垣 大 法	三木眼科 院長 三木 統夫	鳥 取 市 立 浜 村 保 育 園
島 村 ジ ョ ー	日海通信工業(株)鳥取支店	バザー 実行委員会	奥 取 羽 徳 行
三 木 皮 康 小 四 郎	柴 田 満 妙	C C F 韓 国 聯 合 会	松 本 勲
手 齋 藤 小 禎 一	半 田 卓 実 子	郡 孝 幸	タニチ・ヘア・サロン 谷口 義明
高 田 橋 昌 和 文 子	竹 下 敏 努	谷 本 正 道	小 竹 秀 明
田 中 橋 伊 佐 夫 子	井 手 添 敦	宮 脇 政 光	ダイヤモンド電機株式会社
高 伊 吹 啓 静	山 本 義 幸 憲	妙元寺住職 明里 好弘	大 谷 恭 一
松 浦 西 岡 京 直	熊 谷 美 栄 文 彦	医療法人社団乾 医院	米 本 萬 世
森 澤 直 義	岡 田 忠 和 彦	(株)中鉄工所 代表取締役 田中 敏明	鳥 取 緑 風 高 校 職 員 一 同
大同 端子製造株式会社	富 川 和 義	山 本 博 博	木 村 和 子
山 本 智 丈 子	山 陰 冷 暖 設 備 (株)	田 丸 敏 高 二 郎	貞 光 由 紀 江 子
片 村 俊 七 文 子	(株)編織屋商店 代表取締役 浜崎 圭祐	林 敬 二 美 克	山 中 友 子
川 口 法 文 淳 夫 子	柏 木 潤 一 史 子	束 原 克 美	山 田 健 朗
西 田 幹 裕 夫 子	花 木 正 公 子	いしど歯科クリニック 石戸 善正	小 沼 肇 康
飯 塚 上 修 一	西 浦 公 玲 子	弁 護 士 法 人 や わ ら ぎ	浜 田 康 子
井 上 裕 子	鳥 山 山 玲 子	医 療 法 人 社 団 荻 原 医 院	東、国府ブロック研修会
川中 修一	叶 原 土 筆 子	卷 田 豊 男	田 中 佳 代 子
田 中 耕 自 子	杉 村 英 裕 雄	川 口 正 良 栄 枝 久	石 田 稔 子
磯 田 教 孝 昭	田 村 達 之 助	安 本 良 菊 枝 久	田 村 愛 子 之
小 谷 憲 司	正 林 督 章	松 岡 菊 敏 久	吉 田 紀 之 秀 子
藤 原 雅 夫 昭 子	(医)きむら耳鼻咽喉科医院	玉 木 敏 久 英 彦	安 田 俊 匡 子
河 上 秀 昭 子	一般社団法人茶道家会 第49回山陽地区大会	池 上 聡 一 茂 山根	中 村 匡 宇 大 郎
村 尾 秀 一 彦 子	市 谷 成 子 子	湯 谷 節 子 子	勢 木 宇 大 郎
中 尾 勝 一 彦 子	酒 卷 佐 代 子 子	海 老 原 光 瑠 子 子	望 月 義 忠
沖 梅 里 智 子	山 根 た か 子 子	吉 田 加 代 子 子	下 石 義 忠
尾 崎 義 喜 代 子	田 中 儀 衛 功 一 利	柏 女 靈 峰 重 忠	鳥 取 県 立 総 合 療 育 セ ン タ ー 有 志
福 嶋 喜 喜 代 子	武 田 山 根 一 利	業の花総合法律事務所 弁護士 駒井 重忠	緑のソングレテラグラフィ 徳永 哲也
藤 井 藤 直 人 仁 代 基 弘 京	岡 崎 家 代 表 取 締 役 山 根 一 利	山 口 登 貴 子 一	鳥 取 医 療 器 株 式 有 限 公 司
内 湯 村 藤 正 文 年	みやもと産婦人科医院 宮本 直隆	梅 澤 潤 智 子 一	森 本 政 司 知 子
伊 藤 藤 谷 年	鳥取中央ライオンズクラブ	百 村 佐 智 子 一	蔵 本 美 知 子 昭 子
茗 荷 京	宗教法人天徳寺 代表役員 住職 宮川 敬之 一	宗 教 法 人 本 願 寺 介	池 成 孝 福 子 巖 子
	中 嶋 哲 一 義 継	井 上 耕 介 一	大 塚 大 塚 巖 子
	野 口 庸 治 一	スカイ・クリニック 片山 正見 一	福 寿 千 尋 彦 子
	中 尾 修 治 郎	中 島 陽 一	尾 崎 祥 彦 子
	岡 田 武 薫 明 司	鳥 取 教 会 ・ 愛 真 幼 稚 園 合 同 バ ー ー	田 中 嘉 鶴 子
	毛 利 谷 孝 明 司	小 谷 祐 司	上 村 優 子
	江 谷 哲 司	米 原 電 気 管 理 事 務 所	鳥 取 保 護 司 会 第 二 分 区 一 同
		秋 崎 る り 子 治	鳥 取 市 立 病 院 産 婦 人 科 医 局 員 総 務 課 ス タ ッ フ 一 同
		木 本 裕 治	石 井 衛 衛
			太 田 法 律 事 務 所 弁 護 士 太 田 正 志
			大 前 靖 孝

氏 名	氏 名	氏 名	氏 名
田 中 宏 和 大 塩 孝 江	金 本 勝 彦 大 塩 孝 江	林 加 代 子 加 代 子 加 代 子	上 島 武 晴 上 島 武 晴 上 島 武 晴
森 原 義 博 塩 孝 江	森 原 義 博 塩 孝 江	森 原 義 博 塩 孝 江	森 原 義 博 塩 孝 江
宮 本 義 孟 健 一 保 一 寿 和	宮 本 義 孟 健 一 保 一 寿 和	宮 本 義 孟 健 一 保 一 寿 和	宮 本 義 孟 健 一 保 一 寿 和
峰 岸 田 村 藤 村 本 林 田 狩 原 木 江 野 谷 本 下 谷 谷 尾 村 澤 村 本 田 脇 本 村 林 野 中 森 村 田 本 野 田 尾 野 井 澤 林 谷 田	峰 岸 田 村 藤 村 本 林 田 狩 原 木 江 野 谷 本 下 谷 谷 尾 村 澤 村 本 田 脇 本 村 林 野 中 森 村 田 本 野 田 尾 野 井 澤 林 谷 田	峰 岸 田 村 藤 村 本 林 田 狩 原 木 江 野 谷 本 下 谷 谷 尾 村 澤 村 本 田 脇 本 村 林 野 中 森 村 田 本 野 田 尾 野 井 澤 林 谷 田	峰 岸 田 村 藤 村 本 林 田 狩 原 木 江 野 谷 本 下 谷 谷 尾 村 澤 村 本 田 脇 本 村 林 野 中 森 村 田 本 野 田 尾 野 井 澤 林 谷 田
多 山 加 米 森 小 吉 葉 木 鈴 土 平 油 岡 山 林 矢 広 西 八 米 田 岡 奥 森 岸 吉 小 中 田 松 吉 福 山 浅 澤 西 奥 葛 金 小 神 裕	多 山 加 米 森 小 吉 葉 木 鈴 土 平 油 岡 山 林 矢 広 西 八 米 田 岡 奥 森 岸 吉 小 中 田 松 吉 福 山 浅 澤 西 奥 葛 金 小 神 裕	多 山 加 米 森 小 吉 葉 木 鈴 土 平 油 岡 山 林 矢 広 西 八 米 田 岡 奥 森 岸 吉 小 中 田 松 吉 福 山 浅 澤 西 奥 葛 金 小 神 裕	多 山 加 米 森 小 吉 葉 木 鈴 土 平 油 岡 山 林 矢 広 西 八 米 田 岡 奥 森 岸 吉 小 中 田 松 吉 福 山 浅 澤 西 奥 葛 金 小 神 裕
鳥 取 県 立 皆 成 学 園 有 志 職 員	鳥 取 県 立 皆 成 学 園 有 志 職 員	鳥 取 県 立 皆 成 学 園 有 志 職 員	鳥 取 県 立 皆 成 学 園 有 志 職 員
水 山 岩 村	水 山 岩 村	水 山 岩 村	水 山 岩 村
鳥 取 県 立 皆 成 学 園 有 志 職 員	鳥 取 県 立 皆 成 学 園 有 志 職 員	鳥 取 県 立 皆 成 学 園 有 志 職 員	鳥 取 県 立 皆 成 学 園 有 志 職 員

氏 名	氏 名	氏 名	氏 名
山本 聡美	小宮 山 紀子	西尾 圭一郎	米谷食品センター 米谷 健
神波 直美美子	小宮 山 寛正	尾崎 八慧子	堀内医院 堀内 正人
岡本 加代子	木島 博正	北尾 嬌子	正岡 康弘
中村 佐智子	有限会社 仕出し料理 やまもと	舟木 和子	河田 瑛子
安藤 清子	岡村 進・衣織	舟木 えみ	岸 本 静彦
八頭更生保護女性会	小林 英明	湯口 房野	山井 上 信正
名越 勉	中林 宏敬	西村 幸恵	鳥取市社会福祉協議会
小西 慶太	慈眼寺 田中 俊道	尾崎 宏行	入江 一 枝敏
福谷 弘誠	山根 健太郎	今田 澄枝	内海 由喜江
古澤 誠浩	谷尾 欣微子	今真 美奈香	中尾 節しのぶ
古川 浩正	河久 間一捷	真真 友香	有田 孝一
岩成 砂広	尾崎 邦男	尾坪 正仁	川植 田 早苗
山本 泰洋	竹本 芳宏	大土 橋原 正彦	植嶋 隆三
神谷 水島 伸晃	高知県養護施設協議会	橋野 興慶	植原 隆
清祐 本英	岡本小児科医院 岡本博文	藤増 田 剛典	小松 下 暢
竹本 謙志	ラスバガス 浜坂店	米子信愛鍼治療院 松本剛典	鳥取いなばライオネスクラブ
山本 裕司	西尾 憲治	大北 美津子	無 名 氏
小宮 山 倫斌	西尾 拓史	白井 道子	
小宮 山 富美子	西尾 百合子	鳥取更生保護女性会 会長 坂尻恭子	

物 品 寄 付 者 (2014.5.20 ~ 11.17)

敬省略

氏 名	氏 名	氏 名	氏 名
大 樹 寺	(有) 安長 家具 店	寝具と婦人服『たなだ』	坂 本 亨
U F O 秋 里 店	ほんものショップモリケン	今 井 書 店	坂 田 剛 一
スリーパー鳥取店	野 口 達 代	大 野 一 好	倉 元 麻 美
パンドラの箱	鳥取教会シオン会	光 浪 優	坂 田 宣 雄
江崎 グリコ (株)	(株) ゆうちよ 銀行 広報	鳥取県運動用具商協同組合	尾 崎 悦 子
徳 田 商 店	(株) ヤ マ ネ 機 材	大雲院地蔵盆子供夜店	斎 藤 正 七 郎
み も ざ の 会	メガガイヤ 広島駅前店	大 隣 寺	有機の里みなかファーム
U F O 安 長 店	山 本 正 明	野 倉 恵	え が お (株)
大 和 建 設 (株)	柳 田 次 郎	山 根 茂	清 水 雅 彦
高 野 晃 一	(株) に し お	小 谷 聖 子	鳥取南更生保護女性会
藤 原 修 司	百 村 清 ・ 佐 智	株式会社 ミ レ ニ 才	日本画グループ鳥取 代表 白岡文江
U F O 扇 町 店	福 田 眞	岸 本 康 代	斎 藤 正 七 郎

会費・寄付金は下記へお願いします

鳥取子ども学園後援会事務局：〒680-0061 鳥取市立川町5-417 鳥取子ども学園内

☎(0857)22-4206・21-9551 FAX 23-0242

振込口座名義：社会福祉法人鳥取子ども学園 理事長 尾崎倅子

振込口座：郵便振替 01490-9-9106 山陰合同銀行鳥取営業部 普通 3422812

鳥取銀行本店 普通 7645611

【お願い】

この「学園だより」は、当法人にご理解、ご協力いただいている皆さまに、施設での出来事、様子等を報告する意味で発行しています。

同封しています寄付金・会費の振込み用紙は、あくまでも皆さまの便宜を考えてのことですので、ご理解いただきますようお願い致します。

今後とも、当法人を温かく見守って下さいますよう、心よりお願い申し上げます。